

■「アルゼンチンを知るための54章」明石書店 2005年9月発行

著者:アルベルト 松本 ISBN4-7503-2185-0 <http://www.akashi.co.jp>

はじめに

南米の最南端に位置するアルゼンチンは日本から最も遠い国である。便が増えたとはいえ日本からの直行便はなく、アメリカ若しくはヨーロッパ経由で最低一度は乗り換えが必要である。最近ではマレーシア-南アフリカ-ブエノスアイレス便というのがあるのだが、クアラ・ Lumpur で乗り換え、そして南アフリカではヨハネスバーグとケープタウンで二回乗り換ええるため、約35時間以上かかるという。かなりの長旅だが、最近注目の南アフリカを市内観光し、リフレッシュして時差ボケを少し解消してタンゴとサッカーの国に到着するのも悪くないという人もいる。

日本ではアルゼンチンといえば、華麗なタンゴやサッカー、広大なパンパと美味しい牛肉、そしてヨーロッパの童話「母を訪ねて三千里」というの話からイメージすることぐらいで、まだ知られていない側面はたくさんある。例えば、以前はハイパーインフレがすごかったとか、1982年にはイギリスと戦争をしたとか、サッカーワールドカップに二回優勝し世界的にも強い選手がいるとか、日本には最近美味しいワインが入ってきているとかぐらいである。

ただ、ビジネスや文化活動等で往来したり、数年現地で生活をしてたという人たちは、時には腹を立てながらも多くの日本人が案外アルゼンチンを好きになり、特にブエノスアイレスというヨーロッパ風の街を気に入ってくれるようだ。他の南米諸国では味わえない雰囲気と発見があるからである。

筆者が生まれ育ったアルゼンチンはヨーロッパ南部及び地中海諸国からの移民によって近代国家を形成した。スペインとイタリア出身が主だが、ポルトガル、東ヨーロッパ諸国、アラブ諸国特にレバノンやシリア、そして少ないが日本や中国、韓国からの移民によって成り立っているのである。戦後は、パラグアイやボリビア、チリ、ウルグアイ等隣国からの移民が多くつい最近90年代の経済成長期にはペルーからも8万人ぐらいの出稼ぎ移民が入ってきたのである。

こうしたラテン的な要素があるため、明るいノ一気な部分やお洒落で見栄っ張りな個性豊かな社会を形成してきたともいえる。しかし、その個性が制度そのものとマッチングしないと混乱を招き不安定な社会を生んでしまってきたのももう一つの事実である。

以前から、「我々は他の南米諸国とは違う」という部分を強調してきており、社会的にも文化的にも、そして経済・政治的にもその違いをアピールしてきた。当然ながら、こうした特徴は外交にも表れ、アルゼンチン人そのものの気質にも反映され、周辺諸国をはじめ世界から評価されることもあればひんしゆくを買うこともしばしばあった。近

隣諸国とは摩擦も絶えず戦争になりそうなきもあった。

アルゼンチンは、経済や社会構造からみても、先進国でも途上国でもなく、なかなかわかりにくい国だとされてきた。そう言う面では日本と類似しているのかも知れないが、戦後、日本と違って確実に停滞の道を歩んできてしまったのである。数々のチャンス逃し、世界の流れに乗れず今は孤立しないように必至であるが、まだ有効な施策を見出せずにいる。

19世紀末、日本の明治維新と同じように近代化を急ピッチですすめ20世紀初頭1930年ぐらいまでは世界5位の先進国（経済大国）であったアルゼンチンは、1960年ぐらいから日本とは逆の方向に行ってしまうインフレと経済の停滞、累積債務問題と国の慢性的な財政赤字、そして軍政と不安定な民政を繰り返してきたのである。

天然資源の少ない日本から見ても、また誰からもみても理解に苦しむ状況である。豊かな国土と少ない人口、教育・教養水準も比較的高い国民、それなりに整ったインフラ、等々経済発展に必要な要素はかなり存在するにもかかわらず、なぜアルゼンチンが国としていや社会としてまとまりがなく何回も同じような過ちを繰り返し世界の流れをつかめないのか、まだ答えがないのである。評論はたくさんあっても、政策と制度構築は追いついていないのが現状である。

本書では、全ての疑問に対して納得のいく答えを出すことは出来ないかも知れないが、一つは、アルゼンチンという国をネイティブである筆者の独断と偏見という観点から日本の皆様に分かりやすく様々な側面をリアルに紹介したいということである。

第一部では、アルゼンチンの建国過程を紹介し、先住民の存在からスペイン探検隊の到来、独立と内戦を介した国造り、そして近代国家の形成と二十世紀の激動を通じて今日までの政治・経済的要素を中心に述べている。

第二部は、アルゼンチンの社会的、文化的要素についてアルゼンチン人の気質や日常的な側面を述べる。アルゼンチンを代表するタンゴやサッカー等についても華やかな部分とそうでない部分を紹介する。また、今問題になっている教育制度、医療制度、貧困問題、治安と司法の腐敗構造をかなり詳しく描いている。

第三部は、今の状況を把握するための経済、政治情勢をあまり知られていない側面からアプローチしている。税に対する意識や政治家たちに対する期待と不満、大統領と地方の有力政治家「カウディージョ」の役割、歪んだ政策決定過程と利権がらみの産業構造、そして日本でも話題になっている国の債務問題等を紹介している。

そして第4部は、たったの5章であるが、筆者のルーツである日系人の移民コミュニティと日本との二国間関係である。これからの日本との関わり方には様々なヒントがあるが、アルゼンチンの全体像を描くことによって、少なからず今後の日本にも参考になるもの、せめて「してはならないもの」がある程度イメージ出来るのかも知れない。本書のあとがきはそうした想いを込めて書いたつもりである。

来日して約15年になるが、日本人が描いているアルゼンチンのイメージはあまりに

も単純すぎる側面があり、長年現地で暮らしていてもこの国と社会の本質、根底、底力、危険性、将来性等を理解していないことが多いと言える。

一方筆者のように海外に住んでいると、祖国はノスタルジックに思えるようになり、良い側面ばかりを強調しがちになってしまうのであるが、できるだけ冷静に見極めながら今まであまり注目していなかった部分を発見又は再発見しながらこの作業に取り組んだ次第である。

思ったより厳しい現実を突きつけられた思いの方が強いが、それが今のアルゼンチンであり、これから軌道修正し立て直して行かなければならない国であると痛感している。

専門家やアルゼンチンを知り尽くしている読者からみればこの本で説明している政治や経済の部分は不十分かも知れないが、「一般知識プラスα」という観点で読んでいただければかなり満足していただけるのではないかと期待したい。

「アルゼンチンを知るための54章」を読むことによって、アルゼンチンの良いところもあまり良くないところも発見してもらおうと共に、ひとり一人が今の日本という社会を改めて見つめ直し、この日本が抱えている又は抱えそうな諸問題に真剣に取り組み、熟考することを期待したい。

アルゼンチンは、筆者が思うところ、一種の「歴史の反面教師」であると考えており、これから更に大きな国際的な責務と国内の諸問題に直面し、そのうえあまり猶予がない日本には少なからず参考になるものはあると思える。また、いずれもっと互いに協力できる部門、補完しあえる分野もでてくる可能性は十分にあると考えられる。

ビジネスや文化交流等で何らかの形でこの国ともう既にかかわっている人たち、又はこれから関わっていかうとしている人たちに少しでもこの著書がお役に立ててくれれば幸いである。

そしてアルゼンチンに住んでいる日本人や日系人にも、もしこの本が届いた場合には新たな発見になって欲しいと望んでいる。

最後に、この執筆を提案してくれた元三井物産の職員で現在ラテンアメリカの文化交流活動で活躍されている平尾行隆氏に感謝すると共に、編集作業には明石書店の大江氏と法月氏、アルゼンチン大使館の職員一同、写真家で友人のイレーネ賀集女史、アルゼンチン在住で旅行コーディネーターをしているモニカ・小木曾氏、その他有意義な助言やアドバイスをくれた方々に MUCHAS GRACIAS！（どうもありがとう）と言いたい。もちろん、この執筆作業を優しく見守ってくれ、いつものように良い家庭環境を提供してくれた妻RIKOには感謝しても感謝しきれない。

私事ではあるが、この作品は40数年前に日本から移民したアルゼンチン在住の両親（ブエノスアイレス州エスコバル市の松本毅と和子）や兄弟、たくさんの夢や希望を抱いて海を渡った日本人移民の方々や両国友好のために様々な方法で貢献してきた、そして今も熱意を持って携わっている人たちに捧げるとする。

2005年3月31日、横浜にて

アルベルト（俊二）松本

注）筆者はアルゼンチン生まれであるため「ファン アルベルト（JUAN ALBERTO）」という名前であるが、日本人の子として生まれたため両親が「俊二」という名前も付けてくれた。ただ、日本国籍を所有していないためこの日本名は実際法的には存在せず、親や親戚、アルゼンチンの日系社会でしか使われていない。